

# 幼稚園における指導 について

本 田 和 子

えば、とかく一斉保育的なものを考えやすい傾向を、いつの間にか持ってしまったのである。

しかし、幼児集団を扱うことがすべて一斉保育に連り、いわゆる自由保育がすべて個人指導によってなされるとする考え方に問題はないであろうか。

幼児教育の場におけるさまざまな指導のあり方、指導の意味といったものを、ここで改めて考え直してみたいと思うのである。

## ①「幼児を指導する」ということ

「幼児を指導する」という行為の意味と、その具体的内容を、はっきりと把握するために、次の例をとって考えてみよう。

ある大病院の小児病棟で、保母を採用した。入院中の幼児・児童の保育に当らせようというわけである。完全看護の実施は、医療や看護の面からはさまざまなプラスをもたらしているのであるが、絶えず成長発達する幼児・児童にとっては、身体的な疾病に対する完全な処置だけでは満たし得ぬ大きな空間のあることに気づいての対策であった。

小児病棟はもちろん、疾病に対する治療の場であって、純粋の意味での教育の場ではない。したがって、収容児童の生活の中心は、当然治療と看護を受けることにおかれている。このような場で保母の展開する保育活動はどんな内容を持ち、どんな形で具体化され得るのであるか。新しい場面での新しい活動であるだけに、関

はじめに

ある地域で行なわれた幼児教育研究会が、次のような研究主題を掲げた。すなわち、

「指導方法の研究——集団的指導と個別的指導——」

この主題を「一斉保育と自由保育」の問題と解した関係者達の数は少なくなかったであろう。私共は幼児教育における集団指導とい

係者たちの関心も深かった。しかし、明確な方針も具体的方向もつかぬままに、実際の営みはスタートしたのであった。

保母のIは、先ず一人ひとりの子どもたちと親しくなるうとした。どのような触れ合い方をするにせよ、ラボートを形成することが先ず第一だというわけである。そして、就学児たちには、一番切実な要求に応じて学習指導を行ない、幼児たちとは自由な時間を遊んですごした。幼児に求められれば、看護婦に手伝って、ヘットの整理や治療の介助もし、排泄の世話もした。食事時には、魚や肉を細かくほぐしてやったり、食べたがらない子どものためにおむすびをにぎってやったりもした。そんなことで、初めの数週間は忙殺されてしまったのである。

「I先生」「I先生」と一人ひとりの子どものよびかけに応じて、病棟内をとび廻るのが日課であった。

やがて、この数週間の経験を基礎にして、生活の整理をせねばならないことに気がかされた。そこで考えられたのが年令別の集団構成である。入院児50余名は各々の病種・病症に応じてヘッドが配置されていて、それは簡単に変更し難い。したがって、空間的な位置は一応そのままとして、保育者の側の活動内容をグループ単位に整理してみたのである。すなわち、就学児については各学校の教科の学習指導と生活指導の二本の柱をたてる。つまり、勉強の時間割とその内容を決め、更に余暇の使わせ方と病院内での生活のきまりを守

り生活を楽しくするための計画を考えたわけである。

一番問題になったのは、就学前幼児の扱いであった。就学児に教科学習を指導するといったような、はっきりした枠組みが作りにくい上に、その実、最も保育を必要とし、保母の手を待っていたのがこの幼児たちであったから。

結局、当時入院していた10名内外の幼児各々について、その発達の必要性が検討された。そして、長期入院児ほど、次のような点に關して発達のおくれが目立ち、そこに重点をおいた保育が必要であることが認められた。すなわち、基本的習慣の自立・ことばによる生活・情緒の発達などである。

そこで、先ず、基本的習慣を確立すること、自身の要求をことばで表現するしつけ、そして周囲の生活のリズムに安定した情緒で適応していくこと、などが、幼児に対する保育の柱としてたてられたのである。

結核のため、2才の時から入院していた5才児Kは、ちょうど2才児程度のことばの表現しかなし得なかったし、栄養失調のMは3才半でまだおむつのとれない状態だった。一人ひとり異った病症と発達段階にある幼児たちに、保母のIは、各々に対するプログラムを一応たて、それを慌しくたどりながら接していった。

「この子は、今、トイレにつれていく時間だ。この子は、今日の午後は砂遊びをさせるんだ」というように。

その中、保育の動きを能率化するためから、数名の幼児をまとめ、同一活動に従事させることが試みられた。すなわち、排泄のしつけ中であるMをトイレに連れていく時の、二回に一回は、KもYもYもいっしょにトイレに行かせる。Kのことはおくれを指導するために、電話ごっこをする時は、MやYのベッドも長い線をつないで電話ごっこをさせるというわけである。幼児たちもいつか同輩の子どもと同一行動をとることになれてきて、一つの生活の流れができ上った。つみ木やままごと道具を媒介として、数名の幼児がいっしょに遊び、更に保育をまじえて、かみくず入れ作りとか、壁面装飾などの協同製作活動にも従事するようになった頃には、お互いの中に、漠とした仲間意識が芽生えかけてきたようにみえた。

「はじめは、人手が足りないと思えばかり思っていました。一人ひとりの幼児が、各々に異なった要求を保育者に対して持ち、それを十分に充たしてやるのが保育だと思えるのに、保育の体が一つ、時間にも限りがあって、一人ひとりの幼児に満足のいくまで接することができない、そればかりが苦になっていました。でも、この頃、もし、一人ひとりの幼児に一人ひとり保育者がついていて、各々に充分な接し方をしていたら、こうして、幼児たちの小さな集団も形成されなかったでしょうし、仲間といっしょに行動する楽しさも味わえなかったということに気づいてきました」

ある日に、保育のもらした述懐であった。

入院生活とは、形式的には一つの病棟という場での50余名の集団生活であるが、そして、各々のベッドに一斉に寝せられ、一斉に食事を与えられ、安静時間を一斉に守らされるという団体生活なのであるが、心理的には一人ひとりが完全に孤立した状態で、単に物理的に同位置に置かれたにすぎない存在である。したがって、同じ目的をもって一つ遊びに従事したり、或いはトイレに行くというような単純な経験でも共に分かち合うことによつて、始めて、集団としての意識が芽生え、子ども同志の社会生活が展開されたというわけなのであった。そして、保育の重点を考えた時に、余りに一人ひとりを見つめすぎ、一人ひとりのちがいに気をとられすぎたために、幼児たちの集団を育てるということを考慮の圏外においていたこと、それがはからずも実際の動きの中から見出されてきたことなどを、改めて認識した次第であった。

私たちは、一年が経過した時、この生活をもう一度整理し直した。そして就学前の幼児に対する扱い方の基本方針ともいうようなものを、次のようにたててみた。

(1) 幼児各々についての発達の必要性を確認すること。発達の必要性は、その個性としての発達段階で生じているもの・病院生活という与えられた環境との関係で生じているもの・更に一般幼稚園或いは一般家庭といった近い将来にその子どもが復帰していく場との関係で生じるもの、の三つの面から捉えられねばならない。

(2) 幼児たちの集団を育てること。病棟内に、小児病棟という一つの集団を育て、その中に幼児集団というサブグループを作って、集団生活をさせて集団性を高めること。これが、家庭から離れて入院生活をさせられるといった偶然の経験を、有効に用いるチャンスとなる。

(3) 個々の要求、個々の満足を集団の中で、満たす経験をさせ、社会的適応力を高めると共に、病児のおち入りがちでない自己中心的な情緒生活・情緒面の未成熟さを防止する。

(4) 幼児一人ひとりと個別的に接する時間を意図的に設けること。

24時間を共にする団体生活の中で、失われがちな一人対一人の結びつきによる心理的安定と充足の機会として、保育が、外出可能の幼児を一人ずつ外に連れ出すとか、一人だけ別室に連れて行って遊んでやるとかいった行為を、計画的に行なうこと。

右の例は、小児病棟における幼児保育という極めて特殊なものである。新しい分野で、しかも病児という対象に関して、試行錯誤と暗中摸索の一年余を経て、何とか求め出された方針であった。しかし、これが教育的意図の下に、おとなが幼児を扱うといった基本的な面で、幼稚園教育にも適用され得る原則を含んでいることに注目したいと思うのである。

小児病棟におかれた保母は「何をしてよいか」迷った。それに反して、幼稚園という場で保育者たちは何となく「すること」を知っ

ているような状態におかれている。つまり、各々の幼稚園には各々の伝統に基き、しかも教育要領という一つの手引きに支えられた生活の流れが何となくでき上がっている。そして、その中で、幼児たちの生活の流し方、保育者にならうべき役割が、何となく決まっているようにみえる。したがって小児病棟の保母のように、幼児たちに対して保育者の果たすべき役割を根本から検討する必要を感じないままに、保育が展開されている場合が多い。

しかし「現在、自分の目の前に生きている30名の幼児の一人ひとり、及びこの幼児の群れに対して、果たして、自分は、何をすべきなのか、どういう関係の下にこの幼児たちとの生活を展開させるべきなのか」これを検討することから、幼稚園での生活はスタートせねばならないのではなからうか。

幼児たちが現段階で必要としていることは何であるのか。しかも、その幼児の生活する時代と社会の動きの中でそれを把握し、更に、幼稚園という一つの設定された環境、すなわち同年令の幼児の集団があり、保育者という専門のおとなが、幼児30〜40名に対して1名くらいの割合で存在し、幼児のために整えられた空間をもつ環境で、特に充たすべき必要性は何であるのか。病棟生活という限られた環境内での幼児の必要性を把握したのと同じ配慮がここでも当然なこれねばならないであろう。

病棟の幼児たちは各々に退院後の生活にうまく適応していかねば

ならない。幼稚園に復帰するものはそこに、家庭へ帰るものはそれらしく、各々の幼稚園や家庭のあり方が調べられ、それに對する考慮がなされた。病院生活はあくまでも一時的・暫定的なものであるからである。もちろん、幼稚園生活は暫定的なものではない。それとして一つの段階であり、一つの価値をもった存在である。しかし、幼児たちは発達の途上にあり、時間の経過と共にすべての幼児が、現在のわが国で行なわれている姿の小学校教育の中に送り込まれるという事実もまた、厳として存在するわけである。したがって、小学校生活への適応・移行といった問題をもっとはつきりふまえた上で、発達の必要性が把握されねばならないであろう。

入園当初の幼児の状態は、一人ひとり異なっている。4才児はもちろんのこと、3才児ともなれば、その個人差は甚しく大である。しかし、個人差に目を奪われすぎるとは、幼稚園という集団の特性を見失わせることになるであろうし、一人ひとりの指導、一人ひとりの個性の伸長といった面も、集団の中で発揮し得る個性として考えていかねばならない。この点でも、病棟の保育経験から把握された原則が当然のことながら、生々しく適用されるのである。

そして、病棟では、トイレに行かせることも、食事をさせることも、安静時間を守らせることも、けんかせずに遊ばせることも、すべて指導内容であった。それを学習することが幼児にとつての課題だったからである。各々の幼児たちの学習課題を果たさせるべくおと

なが助力すること、これが幼児保育における指導という行為と考えるからである。幼稚園における幼児の指導も結局は、ここに帰されるのではないか。幼児の課題解決のために、保育者の果たす役割、それが、演出であれ、助言であれ、或いはリーダーとして、或いはガイドとしてのそれであれ、それらはすべて「指導」といわれ得る行為であり、それらの振舞い方の内容は、すべて、幼児教育における「指導内容」と考えるべきなのではなからうか。

もちろん、幼稚園教育は幼児の生活全体を高めることであり、幼児の生活全体との触れ合いが「幼稚園における指導」であるとすることは、幼稚園界の支配的通念であつて、事新しく論じる必要のないことかもしれない。しかし、生活全体の把握方が、幼児の未分化性にウェイトをおく余りに、余りにも分析されず未整理のままに漠と把握られすぎていることに問題を提起して、より分化した形で、そして幼児が従来生活していた家庭集団とは異なる次元での生活として整理して把握しようとする考え方が出てくるであろう。そして、この未分化・未整理のままの漠とした「生活主義」と、整理され考えられた「教育主義」が、触れ合うことのない対立するものとして存在している現状に問題を感じさせられるのである。

幼稚園での幼児の生活は、幼稚園という設定された教育的環境と、幼児集団と専門の保育者という特殊な関係を、最大限有効に活用したものでなければならぬし、巾広い幼児の生活の中から、それら

の面をとり出して、はっきりとライトを当てていく努力もなされねばならないと思う。明確に、次の段階として存在する現状での小学校教育というものに対する移行過程としての認識もより深くなされねばならないであろう。そして、それらの整理の上になつて、なおかつ、幼児教育における「幼児を指導する」ということが、幼児に生活全体の中で直面する課題を、十分に解決させるためのそのための助力に費されるすべての行為であると考へねばならないと思うのである。

## ② 幼児一人ひとりと幼児の集団

指導方法を考えるに当って幼児を集団として扱うことが一斉保育に連ると、簡単に考えやすい傾向に問題があると感じるのは、私ばかりではないであろう。そして、集団——一斉という結びつきは明らかに論理的にも矛盾しているのである。

集団とは数の集合を単位とした概念であるし、一斉とは行為の生起する時間に基礎を置いた考え方である。実際には、ある人数の幼児の群れが、同一時刻に、保育者の計画しリードする活動に従事する状態を一斉保育とよぶために、一斉保育が集団保育と同一視される傾向が極めて大なのであるが、数十名の幼児が同一時刻に同一活動に従事していても、その活動が個々のものとして扱えられていて、教師の指導のねらいも個々の活動の成就という点におかれています場合、当然それは集団指導とはいひ難いのである。個別活動を同一時

刻、つまり一斉に、扱っているという状態である。そして、これは教育の能率と運営の容易さが中心となって、産み出された生活の仕事みである場合が多い。

集団とは、集まった個々の生活体相互に共通の目標が持たれ、そのために行動が組織化されている状態として、そして成員間に一定の心理関係のでき上る状態をいう、と考えるなら、一斉保育が集団指導に結びつかない可能性は極めて大であるし、自由保育が集団性を低下させるともいひ難いのである。同時にいわゆる自由保育のみが個性の伸長に資する、個々の要求を十二分に充足し得る状態であると、簡単に断定することもできないことになる。

「活動が一斉に行なわれるか、バラバラに生起するか」「保育者によって決められた時刻にそれが誘導されるか、幼児の自由意志で自由な時間に発生するか」よく問題にされる一斉保育対自由保育の対立を、このような形で把えることは実質的には余り意味がないのではなからうか。

要は、個々の幼児が集団の中にありながら、そこに埋没してしまわない「個」として高められる機会と、幼児集団自体が高められる機会とが、うまく重なり合い、バランスがとれているか否か。そして、その機会の設定のしかたが、幼児が無理なく適応し得るものであって、その活動力が十二分に発揮し得る状態であるか否か。これが、本質的な問題であると思うのである。

(尚絅短期大学)